

八戸市民が守る「館鼻岸壁朝市」

流行語大賞には入らなかったが、今年最も記憶に残った言葉の一つが「不要不急」だ。買い物に出る際に「今、必要だっけ？」と自問自答した時期があったし、最近も耳にする。

今年は医療現場に限らず、観光、飲食、エンタメ業界にもつらい年だったはず。春先のテレビドラマでスナック店主が「俺の人生も不要不急だったのか」と嘆く場面には胸が詰まった。ウニやホヤ、タラノメなどふるさとの旬の食材を口にしたいくとも、東京からの帰省は諦めた頃のことだ。

先日の弊紙に地元・青森県八戸市で15年以上続く館鼻岸壁朝市のルポが載った。共同通信加盟各社との連携企画。毎週日曜の早朝、八戸港の館鼻岸壁に約300店が出店、全国から2～3万人が訪れる。新鮮な山海の幸、人々の賑わい。まさに「日本一」だと思う。

例年3月に始まるが、コロナ禍の今年は7月まで再開できなかった。中には死活問題の出店者も。食材の売り先を探したり、車の移動販売を始めたり。それぞれ懸命に生き残る道を探った。

マスクや検温など感染対策を徹底し、緊張の再開。結果、お客さんとの再会を喜ぶ笑顔の輪が広がった。ある出店者は「自分たちだけじゃない。みんなが朝市を守ろうとしてくれていた」と声を詰まらせる。来場者にも、早急に必要なイベントだったに違いない。

コロナとの厳しい戦いはまだ続きそうだ。ただ、人と人とが互いを信じ、共に歩む新しい日常には「不要不急」という無粋な言葉はなじまない。そんな時代になってほしい。不要なのは、マスクもせず大声で会話するなど危機意識を欠いた軽率な振る舞いなのだ。

気付けば師走。混乱と忍耐の一年がもうすぐ暮れる。館鼻岸壁朝市は年末まで。活気はまだ回復途上というから、機会があれば一度訪れてみてほしい。市民の笑顔と元氣と温かさは、マスク越しにもきくと伝わりますから。

デーリー東北新聞社 東京支社長 吉田晃



八戸市民が「日本一」と胸を張る館鼻岸壁の朝市。準備は夜明け前から始まる。（11月1日撮影）



出店者も、マスクやフェースガードでコロナ対策に力を入れている。